

防災・減災について考えよう

新しい年を迎えました。皆さん、明けましておめでとうございます。元気に登校してくれた皆さんを見て、ホッとしました。

今日より3学期が始まります。40日程度の短い期間の学期ですが、3年生は進路を決定していく高校入試が本格的になったり、1・2年生も今年度の1年間の締めくくりを様々な場面で行ったりしていく大切な時間が続きます。引き続き、寒い季節に負けず、健康に留意して頑張っていきましょう。

一方で、1月1日 元旦の夕刻16時10分、私たちの住む東京においても、長く大きい横揺れに、12年前の東日本大震災の記憶を思い出した人も少なくなかったことでしょう。石川県能登地方を震源とする地震—令和6年能登半島地震が発災しました。思いがけない被害に遭われた方々におかれましては、心よりお見舞い申しあげます。また、復旧・復興にご尽力されている方々には、くれぐれも安全に留意され、ご活躍されることをお願いするとともに、一日も早く、皆様に、平穏な生活が戻ってくることをお祈りいたします。

さて来週15日(月)の6校時に『命の週間』の取組の一つとして、防災教育講演会を実施します。清瀬中学校の3学期の命の週間では、防災に関する取組を実施しており、昨年度は、神戸市の人と未来防災センターの方から防災とボランティアについて、お話をいただきました。今年度は、東日本大震災の震源地近くの岩手県釜石市の『いのちをつなぐ未来館』の語り部の方から、防災教育に取り組む大切さをお話しいただき、「清瀬中学校は地域の学校としてどのような、防災や減災に取り組んでいったらよいのか」を考えていく時間にしていてもらいたいと思っています。

年末に皆さんたちも映像で事前学習をしたと思いますが、今回の語り部の川崎さんは被災者です。震災当時、通学していた釜石東中学校と隣の鶉住居(うのすまい)小学校は、津波で全壊したものの児童・生徒570人—99.8%が高台に避難し、生き残ることができました。震災直後は、‘釜石の奇跡’と呼ばれていましたが、今は、その背景に徹底した防災教育があったことが知られ、‘奇跡’ではなく、『釜石の出来事』として語り継がれています。—「奇跡という言葉はあり得ないことがおきるというイメージだが、防災教育をやってきた結果だと思うので、何もやっていない学校が助かったなら奇跡だが、私たちの防災教育も見てほしい。」と話されています。

この『釜石の出来事』は、日常の避難訓練で学んだことを生かして身に付けた主体的な判断と行動が、自分の命だけでなく、周りの多くの命を救ったといわれています。知識としての‘安全’を受け身としてではなく、自分の命を守り、さらに社会の一員として意識して行動する「助けられる人から助ける人へ」の転換が、一人では生きることができない人間にとって、私たちの生き方そのものにも通じるものになったのではないかと感じます。

今年の元旦にも能登半島地震があったように、地震だけでなく、自然災害は繰り返されます。自然を前にしたとき、人間は弱い存在です。だからこそ小さな知恵を集めて大きな力にする工夫が必要です。災害から自分の命や大切な人を守るために、「日頃からの備え」と「災害が発生した時の冷静な判断と素早い行動」ができる生徒になっていましょう。

15日は、有効な時間になることを、期待しています。そして、避難訓練をはじめとした、安全に関する学習に興味をもって取り組んでもらいたいと思います。

以上を、3学期の始まりのあいさつとします。